

## おおだい【浦大町<sup>おおだい</sup>大台】

調査中

## おおみち【大道<sup>おおみち</sup>】 【真坂大道下】

(八郎潟町) 駅前周辺は字中田で、そこから夜叉袋までの左側と役場付近までが字大道で、この字大道を考えて見るに、道のなかった所に直線に立派な道路が造成されたのを大道と名づけたものであろう。現代でいうバイパスでなかろうか。

1996年八郎潟広報 433号「地名と歴史」畠山四郎

## おおさわ【真坂<sup>おおさわ</sup>大沢】

### \*おおさわ\*

沢合いの村には必ず川が流れているので、その流域を総称した大字に沢の付く場合がある。西仙北町の大沢郷もその一つだし、もう一つの大沢が雄物川町にある。

1988年 むめひろし著「地名<sup>はなし</sup>譚」

### \*おおさわ\*

東北のサハ(ワ)はすべて谷合、または谷川。サ(狭)ハ(処)で、山合の狭い所の意味。

1995年 北条忠雄著「解説秋田方言」

## おおしまだ【夜叉袋<sup>おおしまだ</sup>大島田】

「シマ」には島、国、故郷、領地などの意がある。

「田」は田圃の他に土地という意もある。

吉田東伍氏は「シ」は巢、栖のこと。「マ」は所のことだという。つまり居住地と解して良い。

1987年三浦鉄郎著 新編・秋田の地名

## おおかわ【五城目町<sup>おおかわ</sup>大川】

### \*おおかわ\*

吾妻鏡<sup>あづまかみ</sup>に「文治6年(1190)頼朝の支配に対して軍を起した大河兼任が秋田大方(大潟=八郎潟)の氷上を徒渉し、5000人が溺死す」とある。

地名は大方に注ぐ大河、馬場目川の河口部に位置することが由来である。

中世に関係のある小字名に東屋敷、西屋敷があり、いずれも土豪屋敷であろう。近世に入って、宿駅が設けられ、また梅津政景日記に「藩主の巡遊」の記事が見られる。

1987年三浦鉄郎著 新編・秋田の地名

### \*おおかわ\*

戦国時代以前、馬場目川は真坂と夜叉袋の間を通って八郎潟に流れていたという記録がある。真坂の大川作はそのときの地名の名残か。

作者の憶測

### \*おおかわむら\*

大川村(現五城目町大川)は、西流する馬場目川に地名の起源をもっています。川が羽州街道と交差する左岸にあつて一日市村と対称の位置にあるので水陸交通の要衝となっていました。

文治6年(1190)源頼朝に抵抗した大河兼任はこの地方を本拠としていた可能性が高いと思われます。したがって開村は古く近辺に中世の城跡や遺跡が多くでています。

宿駅が設置されていました。宿駅の負担は当村と一日市村で、周辺村々へ助郷を要請し、また藩主の巡遊や津軽藩主の通過のときは、舟・伝馬・人夫・米・大豆などを課していました。

【参考資料：歴史の道調査報告VI「北部羽州街道」

秋田県教育委員会)

“菅江真澄も歩いた歴史の道「羽州街道」”から

NTT東日本秋田支社

### \*おおかわーかねとう\* 大河 兼任

大川(大河)の名を語る上で忘れられない人物